

納得して備えるために、地震学は何が出来るか

What can do seismology?

中川 和之[1]

Kazuyuki Nakagawa[1]

[1] 時事通信社 Web 編集部

[1] Web Service Desk, Jiji Press

<http://homepage3.nifty.com/n-kaz/>

「地震は一瞬、恵みは一生」。2004年8月に神戸市の阪神淡路大震災記念人と防災未来センターや六甲山を舞台に行った第5回地震・火山こどもサマースクール「Mt.Rokko のナゾ」で、参加したこどもたちが2日間の最後に、自分たちの「神戸宣言」として探し出した言葉だ。高校まで六甲山麓に住み、その恩恵をさまざまに受けながら育った私だったが、10年前までは、その一瞬のための備えに思い至ってはいなかった。広く想定される被害地震と言えば、東海地震だったが、対策を進めてきたはずの静岡でも、耐震補強はいっこうに進んでいなかった。

地震の何が伝わっていたのか

兵庫県南部地震以前は、起こるべくして起きたタイプの地震だったのにも関わらず、専門家の常識が地域防の中核を担う行政にすら伝わってはいなかった。これまでの教育や、マスメディアからの情報伝達では足りなかったのだ。遠く太平洋上にある段階から渦巻く雲を見ることが出来る台風や、目の前に特異な地形を作りだして温泉をもたらす火山とも異なり、実感を持って知ることは簡単ではないのが地震だ。

何を伝えていくのか

「敵を知り己を知れば百戦危うからず」の言葉ではないが、得体の知れないものに対して備えるのは難しい。長期的にも、短期的にも備えが難しいからこそ、被害も甚大になるとも言える。専門家にとっての常識を、それを最も知っておくべき地域自治体や市民、そして次世代に対して伝える役割は、国やマスコミだけにあるのではない。専門家自身も果たすべき役割があることを、私たちに改めて確認させてくれたのが、地震・火山こどもサマースクールだった。

実感を持って伝える

この6年間、こどもたちを前に試行錯誤してきたのが、地震をどう実感してもらうかだった。漠然と地震を一般論で伝えていたのでは、実感を持っては伝わらないことは明らかだ。自分たちのローカルな足元やそこで成り立つ暮らしと、地震とがどう関わっているのかを、分かりやすく、具体的に、納得できるように伝える。子どもたちとの双方向で、専門家が学んできたことは少なくない。

ローカルを知る大切さ

1997年3月に「大地震の長期予測はどこまで可能か」と題したシンポジウムで、基調講演したまちづくり計画研究所の渡辺実氏が「地域の防災まちづくりにつなげるために地震のホームドクターを」と提言していたが、この指摘の重要さが、最近になってようやく実感されてきた。50メートルメッシュで我が家の想定震度が分かる横浜市の地震マップと、その作成に関わった専門家たちの関わりを見ると、一つのモデルケースが見えてくる。できれば、こういう地震マップに時間軸を持ち込み、大地の変化を表すことが出来たら、地震がもっと見えてくるだろう。

